



Title	近世文学の一領域としての「奇談」
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	日本文学. 2012, 61(10), p. 24-35
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48811">https://hdl.handle.net/11094/48811</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 近世文学の一領域としての「奇談」

飯 倉 洋 一

## 一 「奇談」という領域の仮設

近年、「奇談」という領域を近世文学史に布置することを一連の拙稿（『奇談から読本へ』（『日本の近世』12 文学と美術の成熟）中央公論社、一九九三年）、「奇談」の場（『語文』第78輯、二〇〇二年）、「奇談」史の一駒（『日本古典文学史の課題と方法』二〇〇四年など）で提唱してきたが、これを好意的に受け止めて下さる方、批判して下さる方がいて、問題提起をした意味はあつたと考えている。しかし、筆者の提案は必ずしも十分に伝わっているとは言えない。たとえば「浮世草子」「読本」などと同レベルで、「奇談」という「ジャンル」を提唱していると受け取られているさらいがあるが、それは筆者の意図とは異なっている。

しばらくこの問題から遠ざかっていたが、折角与えられた機会なので、あらためて近世文学の一領域として「奇談」というカテゴリーを仮設することの意味について、現時点の私の考えを述べてみよう。旧稿と重なる部分もあることをお許しいただきたい。

ここにいう「奇談」とは、もともと近世の書籍目録に現れる分類

のひとつである。宝暦四年刊行の『新增書籍目録』（京、永田長兵衛刊、以下『宝暦目録』と称する）において初めて現れ五十七点を掲載、次の明和九年刊行の『大増書籍目録』（京、武村新兵衛、以下『明和目録』と称する）にも継承されて七十六点を掲載した。

宝暦以前の享保十四年刊の『新書籍目録』（京、永田長兵衛）では、「仮名物並草紙類」という分類があり、百四十一点を掲載するが、これは現行文学史用語でいう浮世草子が多くを占める。「仮名物並草紙類」は『宝暦目録』では「教訓」「奇談」「風流読本」の三分に分かれる。「風流読本」すなわち浮世草子であるが、『宝暦目録』で九十五点を掲載、『明和目録』では三十三点に激減する。

「教訓」は享保改革の庶民教化政策に応じたものとはいえ、『宝暦目録』で十九点、『明和目録』で二十点と横ばいであるのに対して、『奇談』は『宝暦目録』の五十七点を『明和目録』で七十六点に増やしており、「風流読本」を上回る。「風流読本」すなわち浮世草子は上方文壇の産物だったが、上方の本屋が作った書籍目録でも、はつきりと衰退傾向をあらわにし、どちらかというと江戸の作品が多くを占める「奇談」が台頭してきた様子が明瞭にうかがえる。享



『当世滑稽談義』などは、書籍目録に掲載されていない書物だが、「奇談」に分類されても不思議ではない。なぜわざわざ「奇談」という領域を構想する必要があるのかといえば、それによつてはじめて近世における仮名読物史のターニングポイントが見えてくるからである。

たとえば、現行の「近世小説史」に、「奇談」という領域を重ねてみるとどうだろう。右にあげる概念図は自分の講義で示している一試案に過ぎないが、前期から後期への文学史の流れが、「奇談」という領域を仮設することでスムーズに理解できるように思われる。

## 二 「奇談」史構想批判をめぐって

まず、筆者の「奇談」史構想に対する批判をあげ、これにコメントするところから始めたい。『隔月刊文学』（第10巻1号、二〇〇一年12月号）の特集「上田秋成 没後二〇〇年」で企画された『座談会』上田秋成（稲田篤信・木越治・長島弘明・飯倉洋一）での長島弘明氏の発言。筆者が、「奇談」論の中に『兩月物語』を取り込んでみたい」と述べたことに対する批判である。

長島 「奇談」に対して異論を述べてもいいですか。飯倉さんが「奇談」のことを言われるのは、我々みんな同じだと思うんですが、書籍目録を調べたときに、秋成の「諸道聴耳世間狙」と「世間妾形氣」、片方が奇談の部で、片方が風流読本に入っているというのが、異様に感じられたことがきっかけだと思っただけです。たぶんその経験が

あって、「奇談」というのが、いままでの我々の研究がある程度相対化する概念として出てきた。それはいいんだけど、まちがっていないと思うのは、あれ（書籍目録―飯倉注）が近世という時代の全体的な合意だという前提でやってはいけません。

つまりあれは本屋が分類したもので、本を売るときに便宜的に付けた分類の名称なんだから、その限定をつけないといけない。ジャンル意識を考えぬいてそうしたわけではない。あの時代には、我々が考えるような意味でのジャンルなんてことはひとつも考えてない。つまり、気質物は普通には風流読本なわけですから、もし『世間狙』に「何々気質」というような題名がついていれば、当然風流読本に入っているわけ。それだけの違いでしかない。（下略）

また次のようにも発言している。

長島 書籍目録を重く取り上げすぎると思うの。そうする必要はないと思う。書籍目録の分類を取り上げることは、いかにもなんか我々とは違うところをテコして、相対化しようという意図に傾きすぎる気がする。

もちろん座談会上でも筆者なりに反論をしていたのだが、このやりとりを実際に読まれた方から、「奇談」論争に關しては、筆者の形勢悪しという印象を受けたとの読後感をいただいた。今読み返してみると、たしかに肝心のことを述べていない。この場を借りて、長島氏の批判に感謝するとともに改めてお答えしたい。

実は、筆者が「奇談」に注目したのは、秋成浮世草子の二作品が、

書籍目録で別の分類になっていたからではない。「奇談」に関する最初の論考は前掲「奇談から読本へ」だが、この論考では、読本の祖とされる『英草紙』を文学史的にどう位置づけるかという問題意識から、『英草紙』が当時の書籍目録で「奇談」に分類されていることに注目した。それが「奇談」という領域を構想した契機だった。その「奇談」書に、筆者が『叢書江戸文庫』の一冊として編んだ『伏斎楞山集』に収めた著作や、楞山を經由して調べはじめた常盤澤北の著述もまた多く含まれることが「奇談」書への関心を深める理由だった。

さて、筆者は「奇談から読本へ」において、『英草紙』が「奇談」書の中では突出して高度な文芸性を有していることを指摘した。それは「奇談」書に分類すべきでない作品がそこに入っているという意味ではない。むしろ、他の「奇談」書との共通性を考えることで、『英草紙』の画期性もまた浮かび上がるだろうと考えたのである。ちなみに、筆者はこの論考において、秋成の浮世草子には一切触れていない。

「奇談」とは本を売る際に便宜的に本屋が分類したもので、当時の人のジャンル意識を反映したわけではないという長島氏の見解は全くその通りであり、私も同様の立場である。念のために、旧稿から引用しておく。

しかし、急いで付言しておかねばならないのは、当時の書籍目録における分類だからといって、あまり過大に評価してはならないという点である。宝暦目録では「奇談」であった『当世花街談義』が明和目録では「風流読本」となり、逆に宝暦目録で「風流読本」で

あった「非人敵討実録」が明和目録では「奇談」に収載されるという事実、「奇談」に俳書や南京将棋の解説書が含まれているということなどから考えても、おそらくは中身を読まずに、場合によっては書名のみで「奇談」に分類してしまったというのが実情であったと推測される。

(拙稿「浮世草子と読本のあいだ」、『国文学』二〇〇五年六月号)

このような認識であるから、筆者が「奇談」を浮世草子や読本に代わる、あるいは並ぶジャンルとして提唱しようとしているわけではないことはおわかりいただけるだろう。ただし、「近世小説史」において、浮世草子から読本へという流れの中で、浮世草子にも読本にも収載したい作品が、享保から明和・安永期に現れ、先学はその処理に苦慮しており、「いつそ何か別のジャンル名を考えた方が早いようにも思えるほどである」(中野三敏「讀本年表・瑣事」、『読本研究』第十輯、一九九六年)とか、明和五年刊の奇談集『花実御伽硯』(この書は『明和目録』では「奇談」に分類されている―飯倉注)を「収納する既成のジャンルがない」(篠原進「浮世草子の汽水域」、『浮世草子研究』創刊準備号、二〇〇四年)と述べられると、それについて答えようとして「これからの近世文学史の構想において、まさにそのような過渡期のテキストを収納する受け皿として「奇談」というジャンルを仮設しておくのもひとつの方法である」(前掲「浮世草子と読本のあいだ」と言ってしまったのは、我ながら誤解を招く表現であった。もとより「奇談」というジャンルの仮設」は、「いつそ有効な方法が提示されるための捨石的試案」(同)であり、「奇談」とはあくまで「仮想的な領域」(拙稿「怪異と寓言―浮世草子・

談義本・初期読本、「西鶴と浮世草子の研究」第二号、二〇〇七年）であるのだ。

### 三 「奇談」の意味

さて「奇談」という領域を仮設する意味はどこにあるのか。もとも近世の漢字仮名交じりで書かれた読み物を、近代以後の散文ジャンルとしての「小説」の語を適用して、「近世小説」と呼ぶことは定着している。近世文学を専門に研究していない人にも理解できるような、仮名草子・浮世草子から人情本・合巻までを含む、仮名読物の諸ジャンルを一括りする概念として、「近世小説」に勝る語はないだろう。江戸時代の文学を、非専門の方に、あるいは海外の読者・研究者に開くために、「近世小説」という概念を用いることは有効である。しかし、一方で、この「近世小説」という言葉で括ることによって、排除されてしまう読物群が存在することも事実である。水谷不倒の『選撰古書解題』（奥川書房・釣之研究社、一九三七年）や三田村鳶魚の『教化と江戸文学』（大東出版社、一九四二年）は、そのような枠組みからこぼれおちた読物群を掬い取る著作であった。

翻って、近代の行き詰まりが指摘されて久しく、様々な分野で江戸時代を見直す動きが、ここ十年ほど続いている、単なる江戸ブームとは言えない状況になってきている今、近現代的な観点から仕分けされたものではない江戸時代の読み物にこそ、新たな江戸時代観ひいては行き詰まりの打開へのヒントがあふれているのではないかと夢想するのは樂觀にすぎようか。江戸時代には盛んに読まれていたのに、近代以後はさっぱり読まれなくなった様々な本、たとえば、

重宝記・節用集・善書・經典余師などが、文学研究のみならず、歴史研究からも放置され続けてきたことは言うまでもないが、これらの再評価は近年急速に進んでいる。そういうものはまだまだ埋められているのだが、「奇談」書のいくつかもそれにあたるだろう。

書籍目録で「奇談」に分類される書物のなかには、『英草紙』『当世下手談義』『当世花街談義』のように、すでに文学史的にも重要な位置を占めているものも存在するが、多くは翻刻もされていない（されていたとしても入手がたい）、知られざる読み物である。これらは、「奇談」というカテゴリーを与えてやることで、陽の目を見る。そして重要なのは、これらの読み物が、既成の文芸ジャンル（浮世草子・談義本・読本）に属する作品と並んで「奇談」という部類に配されているということである。ここから、当然のことながら「奇談」とは何かという問いが発せられる。この問いに答えることが、近現代の尺度では測れない、江戸の読み物意識を解明することにつながり、それは近現代の江戸時代観に、何らかの反省を与えるだろう。

「書籍目録の分類を取り上げることが、いかにもなんか我々とは違うところをテコにして、相対化しようという意図に傾きすぎる気がする」（長島弘明氏）という批判をまた受けそうであるが、居直って言えば、近現代の価値観を相対化するのに、「我々とは違うところをテコに」するのは、決して間違っていないと思う。

「奇談」という領域を仮設しようとする時に、難点であるのは、「奇談」が洒落本・黄表紙・後期読本のような、非常に分かりやすい様式を外形的に持っていないことはもちろん、内容的にも、他に

類例のない領域だと言えないことなのである。「奇談」の中に仮名草子の改題本のあることは、「奇談」をジャンルとして立てることの困難さを示すものである。また漢字片仮名交じりで書かれた『道楽庵夜話』、南京将棋の解説書である『白溝戯和解』などは、間違つてこのグループに入れられた可能性すらある。このことは、「奇談」という部類が、浮世草子（風流読本）でもなく教訓書（教訓）でもない、娯楽的な読み物という程度のゆるい枠で認識されていたことをうかがわせる。

だが、それにしても、なぜそれらを「奇談」という語でくくろうとしたのか。近世中期における「奇談」の語の位置を考える必要があるだろう。そもそも「奇談」とはどういう意味だろうか。『日本国語大辞典』を引くと、「珍しくて不思議な話。珍しく興味のある話。珍談。珍説」とある。用例としては『風俗七遊談』（一七五六年）を載せる。もちろんそれ以前の用例は、少なからず見いだせるが、それも享保期まで。それより以前となると西鶴をふくめ、用例を容易には見出せない。また書名に「奇談」が用いられる例も少なく、管見では、享保三年刊『唐話纂要』増補版の巻六柱刻に「和漢奇談」（『奇談通俗』）として、和漢両国に題材を得たふたつの白話小説とその和訳が収められた例が早い。

「奇談」の語の用例も享保頃から見られるようになる。「和漢奇談」の一編「孫八救人得福事」には「遍く伝聞テ、京中の奇談トゾナリニケル」とあり、巷談の場を前提とした使われ方をしている。勸化本『本朝諸仏靈応記』序（享保二年）には、「幽魂怪変の奇談を聞く時は……」「田舎莊子」序（享保十二年）には、「かの味をす、むるの空言」膝を前にするの奇談」とあつて、いずれも「聞く」対象

として「奇談」がある。

享保十九年刊の『本朝世事談綺』（近代世事談）は、「奇談」に分類される書であるが、その後序に「近き世の事コトワザケムレヒイロドケテを談コトワザテ綺キを其ま、に題号とす而已」とあり、「談綺」の表記ながら、内容より語り口に重点の置かれた使用例が認められる。以上からうかがえるのは、「奇談」には談話の場を前提とした「綺キある談カガリ」というニュアンスが色濃く影を落としていることである。「奇談」分類の初めて登場する『宝暦目録』所収書目を見ると、多くが語り（咄）の場を前提とした「綺ある談」の意味で捉えてよさそうである。そしてそういう意味の「綺談」であれば、『日本国語大辞典』に用例として引かれた石川丈山『新編覆轡集』にも、「煮茗留狂客 綺談猶未終」（茗を煮て狂客を留め、綺談猶ほ未だ終わらず）とあつて、近世前期からの用例を確認できるのである。

ちなみに、中国では「奇談」の語はどれほど使われているのか。『大漢和辞典』には立項がなく、『漢語大詞典』には「奇特的言論或見解」とし、用例として明の袁宏道『錦帆集』巻一の五言古詩「答江進之別詩」の「奇談飛金屑」の句を引く。この「奇談」も、語りの場を前提としたものである。また書名としては明代の『西晋南北奇談』『禄嗣奇談』、清代の『繡像風流奇談全伝』などがある。ただ、語彙にしても書名にしてもそう古くは遡らないようである。

#### 四 「奇談」の場と構成

江戸時代中期、「奇談」の語が盛んにつかわれるようになりはじめる享保期の用例から推すと、「奇談」とは珍談・珍説というよりも、「語りや咄の場を前提とした面白い話」と、「談」の方に重点を

置いて理解した方がよい場合が少なくない。そのように理解すれば、「奇談」書という括りの中に、教訓的あるいは知識的な色彩の濃い本も収められてくることに違和感を覚えなない。近世後期になると、「奇談」の語感<sup>ゴカ</sup>は現代のそれに近くなってくる。しかし、「奇談」というカテゴリーを仮設するときには、「談」を重視することが必要である。

「奇談」のひとつの典型として『太平百物語』（祐佐作。半紙本五冊。享保十七年、大阪河内屋宇兵衛刊、『宝曆目錄』所載）をあげてみよう。全五十話からなる短編奇談集である。その序文、

やつがり年比西国に経歴して、貴賤僧俗都鄙遠境の分ちなく、うち交はり語らひける中に、あやしの物語どものそれが中にも、出所正しきをのみ集めて、反古の端に書き綴り置きしをみれば、その數百に満てり。然るを箇中に蔵めて虫葉となさんも本意なれば、是れを梓に寿して、吾にひとしき輩に見せなば、永き夜の眠りを覺し、寂寞なくさむ一助ともならんと、割鬪氏に命じぬ。実に怪力乱神を語るは、聖の文の誡めながら、かく拙き物語も、おかしと見る心より、自然と善惡の邪正を弁へ、賢愚得失の界にいらば、少しき補ひなきにしもあらずと、(下略)

序者は西国を遍歴する過程で、さまざまな語りの場に遭遇し、「あやしの物語」を聞いたが、その中で、出所正しいものを集めて書き溜めていた話を、同好の士の慰みの一助に披露するために出版する。「怪力乱神」を語るのは孔子の誡めだが、この物語を楽しむながら読めば、自然に善惡を弁えるようになるという。慰みと教訓を

うたつた典型的な序文である。書名に『太平百物語』とあるが、いわゆる百物語を紙上再現したわけではない。しかし、書名自体が、語りの場を前提とした話の集成であることを示している。

本書の最終話は、「百物語をして立身せし事」の標題で、ある国の咄好きの若君が、与次という御料理方が次々に繰り出す咄に感心、与次は、若君の成長後、新知三百石を与えられるという、版本末尾話の祝言にふさわしい出世譚である。この中で、与次の繰り出す咄は、「いろ／＼のばけもの咄、或ひはゆうれひろくろ首、天狗のふるまひ、狐狸のしわざ、猫また狼が悪行、おそろしき事哀れる事、かなしきむくひ、武刃なる手柄はなし、臆したる笑ひ草など、手をかへ品を分かち」ての咄であった。そして若君は、与次の咄に「剛臆の差別を知り、恥と誉れの是非好惡を弁へし程に、今以て益ある事おほし」と願みる。本話が『太平百物語』全体の内容と趣旨、さらには書名にも重なることは明らかであろう。序文で作者が述べたことは、本書を読み継いできた読者が、本話に至って実感するよくな仕組みになっている。「百物語」は、ここでは「多くの物語」の意味だろうが、本話には明確に語り手(咄し手Ⅱ与次)と聞き手(若君)が存在しているのである。

このように、語り(咄と言う方が適当な場合もあるが、以下「語り」に統一する)の場の設定とは、語り手と聞き手の存在を前提とする。「奇談」には、この語りの場を本文のなかに再現するテキストと、語りの場を全体の構成要素として持つテキストがある。もちろん、『太平百物語』のように、両方を実現しているものも多い。

語り手と聞き手を前提とした語りの場が設定されているかどうかを基準に「奇談」リストを見ていくと、多くはその条件を満たして



いることがわかる。あるいは、別の言い方をすれば、書名自体から、語り場が設定されていそうだと予想できるものが多い。実際に本屋が中身をそれほど読まないで分類していく場合は、書名を手がかりにするだろう。

筆者は前掲拙稿「『奇談』の場」で、「奇談」における語り場について、とくに談義と咄がその枠組みになっているケースをいくつか検討した。談義の場としては「非人敵討実録」（多田一芳、宝暦四年、江戸泉屋平三郎刊）・「舌耕夜話」（自楽軒、宝暦五年、江戸伏見屋善六刊）・「風流座敷法談」（文海堂、明和六年刊、京都山田宇兵衛刊、咄の場としては「墜下雑談」（陳珍斎、宝暦五年、江戸藤木久市刊）・「茅屋夜話」（隠几子、宝暦五年、江戸大和田安兵衛刊）、『銭湯新話』（宝暦四、伊藤単朴、江戸梅村宗五郎刊）、『雉鼎会談』（藤原陸、宝暦五年、江戸藤木久市刊）の例を挙げた。そして咄の場合は、語り手が次々に変わってゆく「順咄」の形式をとるものがあることを述べた。本稿では、これとは違う用例をあげてみたい。

『野総名話』（常盤潭北著、享保十八年、江戸西村源六刊）は、常盤潭北が、下野と下総を行脚した際の夜話を元としてなっており、題名もその通りである。怪談奇談というようなものではなく、農商階級の人々を相手にした、いたってまじめな教訓話である。

『当世下手談義』（静観坊好阿著、宝暦二年、江戸大坂屋平三郎刊）は、狭義の談義本の嚆矢とされるが、本書も作者みずから「新米所化が、田舎あるきの稽古談義、舌もまわらぬ則だらけ」と、書名の通り、下手な談義に見立てている。

『諺種初庚申』（紀逸、宝暦四年、江戸浅倉屋久兵衛刊）は、序に「怪力乱神も語るに尽て多は狐狸の古狂言に落侍るに、一夜ある方にて

庚申の待に人々進ておとらじと云出る怪異珍話目覚しく、其席に硯を鳴らして書きとゞめ」とある。庚申の待宵に、人々がそれぞれ語った怪異珍話を、その場で書きとめたという形式である。

『不埒物語』（南啓堂梅翁、宝暦五年、江戸吉文字次郎兵衛刊）は、貧しいわが家に同類が来て「夜もすがらの物語を書集」めたという枠組みを持つ。

『大進夜話』（大進、宝暦五年、江戸大坂屋又右衛門刊）は、序に「大進和尚の夜話を書集て、四ツの巻とせしが、直に書題とはなれり」とあるように、大進の夜話を集めたという形式である。

『童問答間似合講釈』（寺崎秀谷、明和六年、京錢屋七郎兵衛刊）は、序によれば、洛東鹿ヶ谷に、十五歳の暖吉、十三歳の寒吉という子供が語り合っていたのを、居合わせた名主分の寺崎甚右衛門が聞いて書き留めたという建前になっている。いずれも、問答・談義・咄の場が設定されている。

ところで、『作者評判千石飾』は、十三作の「仮名本」を役者評判記のスタイルで評判した、本邦初の小説評論とも言われる書であるが、十三作のうち十一話が「奇談」に分類される本である（『非人敵討実録』は『宝暦目録』では「風流読本」、『明和目録』で「奇談」に分類される。『水灌論』は立項がなく、『風姿紀文』は「雑書」に分類されている）。いま、場の設定ということに留意して、本評判記を讀むと、三番目の『諺種初庚申』に対して、「いかさま此書位の咄の本に、あの衆（俳諧宗匠）が汗水たらして何しに骨おらる、物ぞ」と、八番目の『銭湯新話』には、「外題の思ひ付きよく、咄本ながら、教訓ありて、春から段々と書読ての趣向面白くよふ出来ましたぞ」と評する。すなわち、語り手と聞き手のいる場の設定を反映して、

「咄の本」「咄本」と称しているのが注目される。『宝暦目録』には「軽口咄本」という部類が立つが、そこには並ぶ十八作は、短い笑話を集めた軽口本（十八作中十七作が「軽口〇〇」という書名）であり、「千石篩」のいう「咄の本」は、咄の場が描かれているという意味での呼称である。つまり「千石篩」の作者とその周辺においても、「奇談」は語りの場が強く意識されるような本だったということになる。

本書は宝暦四年正月、「本屋表四郎」の刊行である。『作者評判千石篩』は割印帳にも記載はなく、仲間内での遊びで作ったのであろう。版元の「本屋表四郎」は、本文中に登場する貸本屋と同じ名。ここに出てくる登場人物の姓名は、「逢坂関内」「底意地悪石工門」など、全て作者がキャラクターに合わせて創っている。表四郎も「表紙」を掛けた名であり、実在しない本屋だろう。

しかし、武士たちの座談による評判という形式をもつ『千石篩』に、出版も手掛ける貸本屋をわざわざ評判に参加させて、「私共の仲間で寝置物と号て、所々の干見せの隅に埃がついて」などと語らせたり、それ以外の登場人物も、作者に無断で本屋が出版するという事情を知っていたり、伊藤草村の出自に詳しいなど、本屋か本屋に近い人物が作者である可能性がある。だとすれば、「咄の本」という言い方は、「奇談」の性質を本屋側から説明するひとつの証言たりえよう。

## 五 近世仮名読物史上の「奇談」

「奇談」の当代的な語義を考慮しつつ、「奇談」書に共通する外形的特徴のひとつとして、語りの場の設定があるものが多いことを述

べてきた。では内容的にはどうであろうか。啓蒙的・教訓的な内容を持つものが多いというのが特徴といえれば特徴であるが、もちろんこれは「奇談」書に限らず、広く近世文学全般に言えることであろう。それでも、「奇談」書全般に述志の色彩があることは押さえておくべきことだと思われる。

「奇談」の登場とは、近世中期における仮名草子の復活ともいえる（実際、仮名草子の改題本もある）。だからと言って、奇談＝仮名草子とは言えない。では仮名草子全体を見渡した時と、「奇談」書全体を見渡した時、どのような違いがあるのだろうか。それは仮名草子には見られなかった創作意識、表現意識が芽生えているということであり、それが、後期に新たに生まれる諸ジャンル（洒落本・「談義本」・滑稽本・「読本」等）の前兆と捉えうることであろう。そこに、「近世小説史」への「奇談」の位置づけがある。ただ、「近世小説史」という言い方自体が、江戸時代に即したものとはいえないので、ここでは「近世仮名読物史」という言い方にしておこう。

「近世仮名読物」とは、紀行文・教訓本・軍記・雑書なども含めた仮名書の読み物全体をさす。「近世小説」よりも江戸時代に即した言い方ではないかと考え、仮に用いることとする。なお筆者自身、かつて科研報告書においてこの言い方を用いたことがある（『奇談』書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築、二〇〇七年）。

この観点に立つとき、「奇談」書に一部見られる「寓言」という方法の意識的採用は注目してよいのではないだろうか。たとえば、伏斎樗山の作品の中で、『英雄軍談』『雑篇田舎莊子』『六道士会録』『宝暦目録』の「奇談」に掲載されるが、樗山の作品は意識的に莊子の三言の方法を用いたものであることは、『雑篇田舎莊子』の、

子が記する所七部の書、外題異なりといへども、終始みな一意にして、全体田舎莊子なり。其の語る所、逍遙遊、齊物論、人間世に過ぎず。その物に托するは寓言なり。神仏を仮るものは重言なり。その戲談は危言なり。衆口に調和して他の上を慰するといへども、皆大宗師をはなれず、事實は古書に考て、仮にも証なきことを記せず。

(寛保二年刊『雑編田舎莊子』)

という言説は、莊子三言を教訓に利用するという楞山寓言論の総論である。次にあげる兵法・戦術の要諦を戯作の形で説いた『英雄軍談』(享保二十年刊)序文は、各論にあたる。

吾党の小子、治世に生れて、幼きより戲遊の事に長じ、その職分をしらざるものおほし。然ども遽かに是をしらしむべからず。暫らく帝釈修羅閻魔の戦かひを仮り、そのことを設け、正成・元就・勘助等の言に寓して、軍中の法令、備の大略をしめす。所謂寓言なり。古人の言を以て直ちに記せば、小子みることを厭ひて手にもとべからず。故に戲談を以て事を記し、そのうちに実を含んで見るに便よからしむ。同遊相集りてこれを弄せば、久しうして内に感通し、其志の由ところを知事あらん歟。或曰、「子は聖人の書を誦者なり。然るに仏をもつて事を記するものは何ぞや」曰、「仏は人の信ずる所なり。人情の重んずるところに因て、言を立て、信をとる。所謂重言なり。戲談はいはゆる危言なり。然れども無実虚談の言をなし、他の耳目を悦ばしめ、人の惑ひを生ずる事は、予が甚だ愧る所なり。故に仮にも出処なき事を記せず。

これらの言説を談義本や初期読本、あるいは戯作一般の創作意識の源流と考えることができよう。すなわち、近世仮名読物史における「奇談」の意義のひとつである。

かつて私は、「奇談」書のなかに読本の祖といわれる『英草紙』が含まれていることに注目し、該書が、「奇談」書に共通する性質を持ちつつも、それらから突出する新しい方法意識を持つことを指摘し、それは「奇談」から「読本」へという道筋をつけるヒントたりうると考えた(前掲「奇談から読本へ」)。「英草紙」が「奇談」書群のなかで突出しているのは、それが白話小説耽読に裏付けられた翻案であるということ、登場人物の議論が知識人を相手にする術学的な議論であるということ、そしてなにより主意を伝える方法意識の高さであろう。南畝がこれを読本の祖と位置付けたのも、京伝・馬琴の持つ高い方法意識の先蹤を庭鐘に見たからではないか。

『英草紙』の序は、作者の隣家に住む「方正先生」が、「英草紙子の藁」を取り、目録を一瞥して、「青雲の志」ある者がかかる「遊戯の書」に手を染めるとは嘆かわしいと苦言を呈し、これに「余」が応えて、

先生の言はなり。余また此の書の為に説あり。彼の釈子の説ける所、莊子が言ふ処、皆怪誕にして終に教となる。紫の物語は言葉を設けて志を見し、人情の有る処を尽す。兼好が草紙は、惟仮初に書けるが如くなれども、世を通るる事の高きに趣を帰す。

というが、ここには教義を導くのに面白い語りをもつてする「奇談」

書の基本的性格を看取できる。「同社中の茶話に代」えんとするところがあり、これは二作目「繁野話」(これも『明和目録』では「奇談」に分類される)の序に「戯作して茶話に代ゆ」という云い方も同じで、「奇談」書の枠組みとしての場の設定という特徴を引きずっている。また序は「義」をその教義として掲げるが、これも「奇談」書に共通した教訓書性格に他ならない。序の末尾は次のことである。

此の二人生れて滑稽の道を弁へねば、聞を悦ばすべきなけれども、風雅の詞に疎きが故に、其の文俗に遠からず。草沢に人となれば、市街の通言をしらず。幸にして歌舞伎の草紙に似ず。賜覧の君子、詞の花なきを以て、英の意を害する事なくして、両生の幸ならんのみ

「滑稽の道を弁へ」ぬとは、当代世俗小説(八文字屋の気質物)の文体に遠いこと、「風雅の詞に疎き」とは王朝物語や和歌の雅言に疎いこと、「市街の通言をしらず」とは都会の流行語を知らぬことと解せられている(日本古典文学全集「英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語」頭注、一九七三年)。ただし「滑稽」は第一話「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」のなかで「今の俗僧の俗男女に説き聞かしむる所は、理を浅く説くをもつぱらとして、滑稽笑話の類なれば」とあるところから見て檇山らの教訓読物の滑稽な文章を想定すべきだろう。いずれにせよ、表現上、従来の文芸に及ばぬという謙讓の姿勢を見せながら、実は新文体の創造に自負を抱いていると読める。日本古典や唐話に精通した表記の試みなど和漢両文脈の自在

な駆使によって和漢雅俗を織り交ぜた新文体を創出したのは庭鐘の知識教養のなせる業だったが、このような新文体創造の表現意識は、教訓啓蒙の「奇談」を高度な文学作品に仕上げようとする精神に由来するのではないか。「奇談」の典型的なスタイルである半紙本五冊の体裁を守りつつ、すなわち従来の「奇談」の陣営に自らを置きながら、浮世草子や物語や「歌舞伎の草紙」を超える文体を創造したことの自負を序文は語っているようだ。

『英草紙』が「奇談」書の精神圏にあつたことを、第一話「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」で確認しよう。同話は『警世通言』所収「王安石三難蘇學士」を翻案したものである。三つの議論があり、第一は、原典の王安石と蘇軾の漢詩をめぐる議論が、後醍醐帝と萬里小路藤房の和歌の議論に置き換えられている。藤房は帝が速水という者に与えた古歌「あづま路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな」(源俊賴の歌)を帝の御製と思ひ込み、「速水」と「逃水」を掛けるのは不審と難じた。帝は気色を損じ、東の歌枕を見て来いと命じた。武蔵野に赴き、土地の田夫から逃水の説明を聞き、帝の示した和歌が古歌であつたと知つた藤房は自らの浅才を恥じた。「逃水」のような奇異なる自然現象に合理的説明を与えようとするのが享保以来の博学的風潮の雰囲気であつた。『宝曆目録』の「奇談」書のひとつ「諸国里人談」(寛保三年刊)巻三「山野部」の説明では「麗なる春のそらに地氣立て、こなたより見れば、草の葉ずゑをしろく」と水の流るゝごとくに見ゆるなり。その所に至て見れば、その影なくて、またむかふに流るゝごとく影あり。いづれまでも其所をさだめず。行ほど先へ行て逆行やうなるゆへに、かく名付たる。春より夏かけてあり。秋冬はなし」と述べ、俊

頼の歌を引用する。『英草紙』第一話では、地元の田夫が藤房に向かつて「あれは川にては侍らはず。あれこそ山峰に雲を出だすが」とくにて、地気のなす所、いつとても春夏の際、遠所より見る所、水の流るるやうに見ゆれども、水にあらず、其の所には行けば見え、行けども行けどもむかうへ行くやうなれば、むかしより逃水と名づけぬ」と語ったが、これは「諸国里人談」の説明とほぼ同じ。やはり『宝曆目録』『奇談』に載る『龍宮船』巻一「東国影沼之説」においても、武蔵野の「逃水」についての考証がなされている。このことは、庭鐘が同時代の「奇談」書作者の精神圏にあることを意味する。

第二の議論では、太平の世に帝が遊戯に耽けり、女謁盛んに行なわれ、僧侶が跋扈しているのを嘆じて、藤房は、仏徒の国を危うくすることを説き言葉尽くして諫言する。しかし帝は、今時の僧侶はへつらい者ばかりで国法を害する力はないと喝破し、「今の俗僧の俗男女に説き聞かしむる所は、理を浅く説くをもつぱらとして、滑稽笑話の類なれば、二度童にかへりたる婆翁、理屈はなしと同じ耳に聞けば、誰か聞きこんで発心するものもなく、説法者も聴衆に憚らず、書籍は膝前に披きながら、目はひたすらに空焼のかたにむかふ」などと冷静に述べる。これが当時の談義流行をあてこんだものであることは明らかである。これも『宝曆目録』の「奇談」のなかに載る宝暦四年刊『下手談義聴聞集』巻四の「物語にて近年の談義僧は、はでを第一にして、役者の声色をまねらるゝ、是はやくしや違ひか。今時は談義にも仏書からだんぐ、軍書にひろがり、仏の説法すくなく、婆々様達の軍しり顔聞くにおかし（中略）其中へ当世もてはやす落し咄といふ事を入れて、うれしがらせ」といった文章

の、談義僧の俗化を諷する論調に共通するのである。ここにも「奇談」書作者としての庭鐘が顔を出している。

これらの展開は、後醍醐帝を語り手とし、藤房を聞き手とした場を設定した上で、和歌の知識、自然現象の科学的解釈、談義僧批判などを「寓言」という方法によって読者に伝える典型的な「奇談」の行き方であるが、白話小説の方法の導入や、高度な知識の開陳、表現意識の高さなどは、「奇談」書のレベルを超えたものであった。このことは、「奇談」という領域を仮設し、『英草紙』をそのなかにおいてみることでみえることなのではないだろうか。

#### おわりに

筆者が仮設を試みた「奇談」という領域は「教訓・啓蒙を目的と、語りの場を枠組みとしてもつ、面白い話の集成」という平均的な内容をもつ仮名読物群であった。書籍目録上は「教訓」「雑書」「風流読本」と隣り合わせて相互に可換的な面もある。加えて書籍目録上分類困難な読物をもそこに引き取って収めることもある、境界の緩やかなカテゴリーであった。その内実は、仮名草子・浮世草子と重なる部分もあるが、一方で、橋山・庭鐘などの、後期戯作の魁となる高度な方法意識や、新しい試みを孕んでいた。文学史的に位置づければ「奇談」は、近世前期の仮名読物と近世後期の仮名読物をつなぐ、橋渡しのな役割を果たした領域だと評価できるのではないだろうか。

(いいくら・よういち／大阪大学)